春に思う

札幌市医師会
小児科西町クリニック
池田　和男

クリニックの狭い自室（一応院長室です）に、春の訪れを感じさせる午後の暖かな日が差し込んでいます。今日は保育園健診や研究会の予定もない午後休診の日。先ほど、初孫の幼稚園の入園式の写真がケータイに送られてきました。自宅から徒歩で通える幼稚園を選んだようです。有名デザイナーのものではないのでしょうけれど、制服・制帽のちょっと緊張した孫と息子、お嫁さんの写真です。わが息子もいつの間にかすっかりオジサンの風情が漂っています。

東京女子医大心研小児科での私の研修に伴い、息子は新宿の保育園に通い、私が当時の道立小児センター（現：コドモックル）に戻ってからは銭函での幼稚園生活を経験しています。息子が保育園から大学を卒業するまでに、入学式・卒業式・父兄参観日などに参加したのはたった一度きり、小学校の入学式だけです。もうすぐ式が始まろうとしている時に「センターへすぐにお戻りください」と校内放送が入りました。当時携帯電話は無く、今は既に役目を終えたポケベルも持っていなかったのでしょうか？記憶は定かではありません。センターに戻ると同時に小樽から救急車が到着。意識レベル低下・高度徐脈・血圧低下の、息子と同じ年頃の男の子で、ウイルス性心筋炎による完全房室ブロック、Adams-Stokes発作でした。一時的ペーシングを要しましたが、１ヵ月半ほどで元気に退院していきました。

その後、入学式の時のことを尋ねたことはありませんが、息子が小学校の卒業を控えた頃に「将来は何になりたい？」と尋ねたことがありました。「マイホームパパになる！」と即答されたのにはびっくりしました。現在30代半ばになった息子は、人工関節を扱う会社の営業マンとして頑張っているようです。出張が多く、毎日忙しく働いているようですが、小学校の時に抱いた将来の夢（？）の「マイホームパパ」を実行中なのか、自宅に居る時は「パパン、パパン！」と自分の息子に追いかけられているようです。小学校の入学式以外、父兄参観日などの学校行事には一度も行かない（行けない？）父親を、息子はどう思っていたのでしょう。父親と同じ道を選択しなかったところにその心が見えるようです。

30年近く前のあのS-Aの男の子は、今では患者さんのお父さんとして、二人の男の子と奥さんと一緒に時々クリニックに顔を出してくれています。小児科医冥利に尽きると言えそうです。孫の入園の日、春の暖かな日差しに眠気を催しながら机に向かい、この文章を書いています。

北海道の大都会の中の小さな自然

札幌市医師会
独立行政法人地域医療機能推進機構 北海道病院
竹内　　正

企業の専属産業医を25年近く務め定年退職し、東京から札幌に転居して５年あまりが経った。野山の散策が好きな私にとって、北海道は以前から憧れの地。幸いなことに非常勤で働かせていただける病院も見つかり、何とか道民の“一員”として日々を送らせていただいている。マンション10階のわが家から間近に見える札幌周辺の山々は私をじっとさせていてくれない。関東地方ではお目に掛かったことのない『熊出没』の注意書きにおびえながら、一人熊鈴を鳴らし、大声を出しながら幾山も征服。また遠く北方に稜線を横たえる暑寒別岳。高齢、腰痛、車無し、山仲間無しで諦めていた登山が、昨年ツアー参加でついに実現！　四季折々のその山容がわが家の窓からくっきり見えるたびに胸が熱くなる思いである。

札幌に転居した喜びを最も強く実感するのはしかし、市内の身近な自然である。通勤途中で通る、勤務する病院近くの、ひと跳びで渡れそうな小川沿いの緑地帯。大都会の住宅地の中の整備された小さな公園だが、かなり大きなハルニレやオニグルミ、センノキなど多種の樹木とクマイザサも繁る人の手が入った自然が残っている。そこで出会う生き物たち――

♣頭上の枝から闖入者の私を威嚇したり、雪の下に隠したオニグルミの実を探すエゾリス
♣川沿いの雪の庇の下を探るミソサザイ
♣大雪となった初雪の朝、上流の森から川沿いに迷い込んできたのか、エゾシカの姿
♣春から初夏にはアオジ、オオルリ、キビタキなどの見事なさえずり
♣小径で毛繕いするキタキツネ

９月、この小さな川をしぶきを上げて遡上する50センチを超えるサクラマスを見た時は思わず“うわっ、北海道！”と声が出てしまった。ほかにも植物や昆虫類など、単に北海道固有種だけでなく、関東でも見られるはずの多くの生き物たちに会える。北海道で生まれ育った方には、これらはごく当たり前の光景なのだろうか？　確かに東京でも郊外に行けば出会えるかもしれないが、大都会の中で、それも通勤途中でこのような光景を目にするのは、私には奇跡的としか思えない。これこそが北海道の“北海道らしい魅力”の根源ではないかと思う。この魅力を失わないためには、周囲の森や山々の存在、その互いの繋がりを含めた生態系の持続・維持が必要不可欠である。これからもこの北海道らしさが失われないよう願っている。